ありがちな設定のありがちな話　～リリカルなのはStrikerS～

スキアヴォーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありがちな設定のありがちな話　～リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～

【Ｎコード】
Ｎ８１３７Ｙ

【作者名】
スキアヴォーナ

【あらすじ】
目的の違う５人の人物が、１人の女性の下へと集う。各々の目的を果たす為に。そして彼らと出会う機動六課をはじめとする管理局の魔導師達…そんな感じのリリカルなのはの二次創作です。

プロローグ（前書き）

この小説は、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳの二次創作です。

○オリキャラが多数登場します。
（プロローグで全員顔出しはさせますが）
○設定がベッタベタかつ、中二臭い要素ありです。
○作者はどちらかというとレジアス擁護のアンチ六課気味です
かといって、理不尽な設定・キャラ改変、メアリー・スーの予定は無いです。
○オリキャラは強設定ですが、俺ＴＵＥＥＥの要素の予定も無いです。
六課と拮抗するくらいの実力のつもりで進めていきます。
○更新速度はかなり不定期になると思われます。
○作者の文才はかなり低いです。でもそれを言い訳にするつもりはありません
誤字脱字の報告、設定の矛盾、要望、意見などありましたどんどん下さい。
ただ、ガラスのハートですので、あまりにも理不尽な感想はやめてください。
（具体的な指摘も無しに、ヘタクソだの書くのやめろとかの感想を書くとか）

以上のことを踏まえた上で、お読みください。

プロローグ

ー新暦６６年、第１８管理世界のとある都市の市街にて

「…ちくしょう」

暗闇の中、月明かりが１人の少年を照らしている。
黒い髪、黒い瞳のその少年は、着ている白いパーカーのポケットに両手を突っ込んでいる。
その表情に浮かんでいるのはあからさまな怒り。
それも、やり場のない理不尽な怒りに震えているものであった。

「…ちくしょう…！」

歯を食いしばったまま、少年は再び呟く
少年がいる路地裏には、彼以外の人間はいない。
他にいるのは散らばっている生ゴミをつつく、数羽のカラスぐらいである。

「…ちくしょう！！」

少年は、今度は声を張り上げて叫び、近くにあったゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。
その音に驚いたカラス達は、月が浮かぶ夜空へと舞い上がる。

「何でだ…！何でなんだよッ…！！」

拳を握りしめながら俯き、少年ータツマ・ノダは絞りだすような声でまた呟く。

こんなことをしていても何にもならない。それは少年自身がよくわかっていた。
だが、かといって自分がこれからどうすればいいのかさえわからないのだ。

「父さん…母さん…サヤカ…」

数年前まで一緒だった。みんなで笑って幸せな日々を過ごしていた。
が…それが5年前、脆くも崩れ去った。
自分以外の家族が皆殺しにされた。生き残ったのはタツマ一人だけだった。

家族を殺した奴らへの復讐、その為だけにタツマは管理局員になった。
彼の両親も魔導師だった。故に彼の自身にも魔法の素質は宿っていた。
管理局でメキメキと腕を上げていく中、タツマは家族を殺した連中が何者なのかを知った。
そいつらを捕まえて法の裁きを受けさせる。それがタツマの絶対の目標だった。

…しかし、1年前にそれは決して叶うことのない目標へと変わってしまった。
そのあまりにも理不尽な結果に、タツマは怒り狂った。
だが、一局員でしかないタツマの我儘が通る筈もなかった。
そしてやり場のない怒りを抱えたまま、タツマは管理局を辞めた。

そして、今は自分の故郷である世界で、空虚な日々を過ごしていた。
自分がどうすればいいかわからない、家族の敵すらとれない。
いや、それを行おうとすれば自分が悪者になる、そんな状況であっ

たのだ。

「クソッ…クソッ…クソッ！！！」

怒りに任せるまま、タツマは辺り一面に広がるゴミを蹴り散らかす。
自分一人では何もできない。そんな自分の無力をさひたすらに呪いながら。

「…いい年こいた男が、なーにをやってるんだか」

ふと、自分以外誰もいない路地裏に気怠そうな声が響き渡る。
タツマはその声のした方へと振り向く。

「なあ？アンタはそんなことをしてるだけで満足なのかい？」

そこにいたのは、ボサボサのオレンジ色の髪で、顔に多数のそばかすがある
白衣を纏った眼鏡の女性であった。

「…なにが言いたい」

不快な感情を隠そうともせずに、タツマは女性に向かって言い放つ。
心の奥底では、憂さ晴らしにコイツを痛ぶってやろうかとさえ考えていた。

「アンタの目を見りゃわかるさ。自分一人じゃどうしようもなくて迷っているガキ…
アンタの顔は正にそれだからね」

「！！…言わせておけば…このババア！！」

しかし女性は、飄々とした態度で、タツマに向かって言葉を放つ。
タツマはその言葉に更なる怒りを覚え、反射的に女性に向かって殴りかかる。

「そうやってすぐ真に受けて暴力…ガキそのものじゃないか…っと！」

「！？」

だが、タツマの放った拳は女性に当たることなく空振りする。
瞬時に体を横に捻ったまま、女性はタツマに足払いをかける。

「がッ…！」

タツマはすぐに体の自由を失い、わけのわからぬまま俯せに倒れ込む。
女性はすかさず倒れたタツマの上にのしかかり、彼の両腕を捻り上げた。

「…けどさ、アタイはそういう奴は嫌いじゃないぜ？」

タツマに乗っかったまま、女性は何故か笑顔のまま更にこう続けた。

「アタイと一緒に来れば、アンタのやりたい事も出来るかもな？」

＊

ー新暦６９年、第１４管理世界、とある研究所にて。

「…データ摘出完了。実験段階は次のステージへと進めます」
「ご苦労、検体にスリープ処理を施せ、今日はここまでだ」

数人の研究員が報告書片手に報告を行い、それを聞いた主任が指示を出す。
管理局に知られることのない違法な研究施設。
そこで彼らは「ある」対象物をひたすらに研究していた。

「睡眠装置起動、タイプ－ダブルゼロ、スリープモードへの移行を開始します」
研究員はポッドの前でパネルを操作していく。
そのポッドの中にいるのは、白い検体衣に身を包み
多数のチューブによって繋がれた青髪の少年であった。
少年は人形のようにピクリとも表情を変えることなく、ただひたすらに前だけを見ていた。

「この実験が進めば我が研究所の技術も飛躍的に上がる。そうすれば…」
「ああ…忌々しい管理局の連中をねじ伏せ、独立することも夢ではない」

ポッドの少年を見つめながら、研究員と主任が下品な笑みを浮かべる。
管理局によって、今までの研究成果の殆どが違法認定される中
ある管理外世界で見つけたのが、その少年であった。
研究者達は、自分の満足いくデータを取る為に
少年に対して数々の非人道的な実験を繰り返してきていた。
そのことに対して彼らは心を痛めることは全くない。

自分達が拾ってきた研究材料に、何をしようがお構いなしという心持ちであった。

「……」

少年は何も感じていない。いや、考えることすら放棄していた。
ここに来る前の自分の過去は何も思い出せない。
脳裏に過るのは、過酷な実験の日々だけである。
自分がなぜこのような体になってしまったのか、自分がどうしてこうなったのか
そんなことが全くわからないでいたのだ。
やがて思い至ったのは考えるだけ無駄だということ。
自分はこの研究施設で、彼らの道具として使い続けられ、やがた死ぬ。
そう思い、何もかもをあきらめていたのだ。

しかしこの日、そんな少年の考えが改まることになる。

「？…異常事態だと？…侵入者…なっ…！」

研究員の一人が突如、異変を感じてモニターを覗き込む。
見ると、自分達のいる研究室に向かって、凄まじい勢いで移動している人物がいた。

「何事だ！」
「侵入者です！このメインラボに一直線に…ぐああ！！」

主任が慌てて立ち上がり、それに研究員の一人が答えようとするが
次の瞬間、研究員は血飛沫を巻き散らして床へと倒れ込む。

「えーっと…おおっと、ここでいいみたいだな」
その背後に立っていたのは、和服のようなバリアジャケットを纏い二振りの日本刀型デバイスを手にした黒髪の少年であった。
「な、なな…何者だ…！」
「ああ、悪いけど説明すんの面倒くさいからさ」
恐怖でガクガクと震える主任に対して、抑揚のない声で少年は答える。
次の瞬間、主任の眼前に映ったのは、ギラリと光る日本刀の刃であった。

「さーてと、こいつをこうやってと…」
数分後、研究所のメインラボに立っていたのは少年一人だけであった。
血の海の中で少年は、楽しげな雰囲気で淡々と、ポッドの前で操作を続けていた。
「これをポチっと…おお動いた動いた！」
少年は最後に赤いボタンを押す。
すると、ポッドの中にいる少年を繋いだチューブが次々と外されていき
ポッドの外壁が上へと上昇していく。

「……？」

ポッドの中にいた青髪の少年は、無表情ながらも戸惑いを浮かべていた。
自分を解放した目の前の少年は何者なのか？何故今になってこんな事が起こっているのか？

「いや～しっかしこういうのって何かスゲえよな！
全身機械のサイボーグ、機人のプロトタイプ！これこそロマンって感じでさあ」

黒髪の少年はお構いなしに目をキラキラさせながらそんなこと言っている。
この場の状況に、あまりに似合わない極めて不自然な内容である。
青髪の少年の方にしてみれば、まるで意味不明な状況であった。

『くだらんお喋りをしてないでさっさと連れて帰ってこい。タツマ』
「ああっとワリいワリい。すぐ戻るからさ」

ふと、黒髪の少年ータツマのデバイスから通信音声が発せられる。
その声の主に対して、片手を挙げて軽いノリでタツマは謝る。
そして、その後に青髪の少年へと手を差し伸べた。

「助けに来たんだ、俺と一緒に来ないか？楽しく生きようぜ？」

＊

―新暦７０年、第６管理世界、アルザスの地・ル・ルシエの里にて

里の関係者以外誰も知る筈のない辺境の洞窟、その中を一人の男が進んでいた。

男は肩まで伸びる銀色のロングヘアー、真紅に染まった真紅の両目は敵対した人間を睨むだけで戦意を喪失させるような、そんな凄みを醸し出していた。

また、目だけでなく、全身からもどこか、近寄りがたいオーラを発している。

男がそんな禍々しい雰囲気を纏うに至っているのは彼の出自が原因である。

男は生まれた時から戦場の最中にいた。物心ついた時から武器を手にして戦っていた。

自分達弱い民を迫害する国家。それに対抗するレジスタンスとして男は戦っていた。

そして男の姉は、レジスタンスのリーダーでもあった。

男は姉から生き残る為の術として、戦いを教わっていた。

しかし、そんな自分の境遇を恨んだことなど一度もない。

自分を愛し、自分の為に戦っていた姉の事を、男もまた尊敬し、愛していた。

だが、国家とレジスタンスの戦いは、管理局の介入という形で一方的に戦局が傾いていく。

管理世界でもあり、管理局との繋がりも深かった国の政府は

管理局本局へと応援を要請し、その圧倒的な力でレジスタンスを蹂躙した。

そして…レジスタンスのリーダーであった男の姉は
管理局の介入に怖気づいた、レジスタンスの幹部達の、自己保身の道具として売られたのだ。
責任の全てを押し付けられた彼女は、大勢の国民の前で大々的に処刑された。

その時の光景を、男は今でも鮮明に覚えている。

剣が振り下ろされ、姉の体からその首が離れた瞬間、男は誓った。
必ず姉の敵を取る。その為に力を蓄える。自分達を見捨てたこの国を消す為に、と。

男はそうして裏の世界へと消え、そして数年前にある女性と出会った。
そして、利害関係の一致からその女性の下へと身を置き
今はこうして、女性の頼みでこの辺境の地へと赴いているのだ。

「…ここだな」

男は洞窟の最奥部、巨大な扉の前へと立つ。
そして、手にした銃型のデバイスに魔力を込め、魔力弾を形成する。

「…消す」

収束された魔力弾が、扉に向かって一直線に飛んでいき、爆発を起こす。
爆風の晴れた先には、巨大な穴の開いた扉がある。

男はデバイスをしまうと、その扉の先へと進んでいった。

「こいつか…」

男がポツリと呟く。扉の先にあったのは、蝋燭の光で照らされた、薄暗い一つの牢獄。
その中にいるのは薄汚い布きれを身に纏った、金髪のくりっとした目をした小さな少女。
その少女に抱えられている、黒竜の雛であった。

「にいちゃん、だあれ？」

少女は入ってきた男を見るなり、キョトンとした表情でそう尋ねる。

「あ、あたしクラム、クラム・ル・ルシエって言うの！にいちゃんの名前はなあに？」

尋ねてもいないのに少女ークラムは自己紹介をする。男は黙って少女を睨んでいるだけだ。
普通の子供なら、それだけで恐怖のあまり逃げ出すのが普通だったのだが

「でね、この子の名前がエリザベートっていうの！可愛いでしょ！」

クラムはそういって笑顔を浮かべて、自分の手の中で眠る竜の紹介まで始める。

「ねーねー聞いてよにいちゃん。あたしねえ、このエリーの為にお

友達を描いてあげたんだよ？
そしたらエリーもすっごい喜んでくれたのにさあ
それを見た里のおじいちゃんやおばあちゃん達にエリーの友達とられちゃったの
そしたらあたしとエリーをこんな所に閉じ込めたりしたんだよ！
ねえ、なんでかなあ？あたしはエリーにお友達を作ってあげただけなのに…」
「…黙れ、消すぞ」

反応のない男に対し、自分の身の上話まで始めるクラム。
その態度に少々イラついた男は、デバイスの銃を取り出し、クラムに向ける。

「ほえ～それカッコいいね！ねえねえ、それは何ていうおもちゃなの？」

ところが、そんな脅しもなんのその、クラムは鉄格子の前までテクテク歩いていき
興味津々な表情で、男の持つデバイスを見上げている。

「…おいエスティ…本当にこのガキで間違いないのか？」
『一応はな、データの年齢や外見とも一致している』

頭の痛くなってきた男は、たまらず協力者である女性と通信を取る。
話の通りとはいえ、ここまで常識外れな少女が目標だとは思っていなかったからだ。

『とにかくアンタの目的はそいつの確保だ、なるべく手短に頼むさね』
「…チッ」

内心で若干の忌々しさを感じつつも、男はクラムの幽閉されている牢獄へと近づいく。

「…ねえ、にいちゃん。はやくにいちゃんの名前を教えてよ～」

が、男の心境も知らずにクラムはぷくーっと顔を膨らませる。
男は手にしたデバイスの銃に魔力刃を形成し、それによって牢獄を破壊しながら口を開いた。

「…ラフェスト…ラフェスト・デュアリスだ」

＊

―新暦７２年、第５８管理世界、管理局支部の建物内にて。

管理局員の制服を身に纏った女性が、会議場へと向かっていた。
しかし女性は管理局員ではない。今日の会議に集まる管理局の幹部を殺すために
局員に扮して、この場所に潜入しているのである。

「…これから始まるのね、私の戦いが」

腰まで届く燃えるような赤いロングヘアーの女性―パレットは、胸に手を当ててポツリと呟く。

―どうしてよ！なんで×××が連れていかれなきゃいけないのよ！

―パパもママも何か言ってよ！どうして何もしないのよ！

―返してよ…！私の弟を返してよーー！！

目を閉じれば、いつでも鮮明に思い出すことのできるあの日の記憶。
自分の家族を引き裂いた、人生で最悪の出来事が起こったあの日。
何もしなかった愚かな父と母はとうの昔に見限っている。
そして、自分の助けたかった、たった一人の人間が、今どこで何をしているのかも知っている。

しかし、パレットはまだ、その人物と会うつもりはなかった。
必至に抵抗したとはいえ、自分の両親と同じように何も出来なかったあの日の自分が許せないのだ。
そのけじめをつけるまで、あの子と会うわけにはいかない。そう心に決めていた。

そして長い間独学で力を身につけ、こうして、家族を引き裂いた連中のいる場所へと来ている。
全てに片を付け、例え血塗られた両腕であったとしても、
自分の中でけじめをつけた上で、あの子を抱きしめて、そして謝ろう。
あの日守ることが出来なくてごめん、と。
そんな思いを胸に、パレットは会議室の前まで来て、扉をノックす

る。

「…？…おかしいわね…」

だが、中から反応は返ってこない。手筈通りなら局員から中に入るように言われ
その隙をついて中の人間を全員殺す手筈であった筈なのだ。

「返事がないわ…どうなってるの…？」

妙な胸騒ぎを感じつつも、パレットはゆっくりと扉を開ける。

「！！…これは…！」

その次に視界に入ってきた光景は、あまりにも予想外の物であった。
殺す筈だった局員たちが、全員後頭部から大量の血を出しながら突っ伏していたのだ。
パレットは動揺を隠せないまま、部屋の中を見渡す。

「あれ？まいったなあ…こんな所見られちまうとは…」

「……」

次にパレットの目に映ったのは、血塗られた日本刀型デバイスを持ち、困ったように呟くタツマと
水色のロングコートと長いマフラーを纏った青髪の少年であった。

＊

―新暦７５年、ミッドチルダ南部、アルトセイム地方のある屋敷

「おっはよー！！」

屋敷の食堂に入ってきたのは、ハイテンションに片手を上げて挨拶をするタツマである。

「もう…遅いわよタツマ、他のみんなはもう食べ終わってるわよ」

「いや、ワリいワリい…徹夜でゲームしてたら寝坊しちまってさあ」

それに答えるのはテーブルの片づけをしていたパレットである。

タツマはパレットに対して、軽いノリで謝罪をする。

「朝っぱらからうるさい奴だ…」

それに対して反応を示すのは、テーブルでデバイスの整備をしていたラフェストだ。

「なんだよラフェスト～お前は相変わらず暗いな～」

「黙れ、貴様の様に無駄なことはしない主義なだけだ」

「無駄じゃね～ぜ？こないだ発売した新作ゲームが楽しくってさあお前もちっとはそういう趣味見つけたらどーよ？でないと人生楽しく生きられないぜ？」

「うるさい…消すぞ」

タツマのハイテンションな会話にイラつき、ラフェストは整備していたデバイスを向ける。

そんな光景を目にして、パレットはまたかといった感じの表情で溜

息を吐いていた。
「タツマにいちゃんもラフェストにいちゃんも、喧嘩はだめだよ～」
そんな二人の間に割って入るのがクラムと、彼女の肩に乗る黒竜、エリザベートである。
クラムは両手をバタバタさせながら、二人を交互に見つめていた。
「大丈夫だってクラム、にいちゃん達は喧嘩なんてしてないよ～」
「ほえ？そうなの？」
「うんうん、そうだよ～」
タツマはにんまりと笑いながらしゃがみ込み、クラムの頭を撫でてやる。
クラムはキョトンとしながらも、されるがままに気もち良さそうにしていた。
「…チッ」
一方のラフェストは舌打ちをした後、再びデバイスの整備に没頭する。
「……」
そしてラフェストの隣に座る青髪の少年ーオスカーは無言のままその光景を見ていた。
タツマはそのオスカーの隣へと座り、冷め始めていたトーストにかぶりつく。
「よお、起きてるかお前ら」

と、その段になって食堂に、白衣を纏ったオレンジ髪のそばかすの女性が姿を現す。

「おふ、おふぁようえふてぃ（おう、おはようエスティ）」
「おはようございますエスティさん」
「おはようなのエスティおばさん！！」

タツマ、パレット、クラムの三人が女性ーエスティ・トゥデイに対して挨拶をする。
（タツマは口にトーストを頬張ったままであったが）
ラフェストは無反応、オスカーは無言のまま顔を少し下げた。
それぞれの反応を見た後、エスティは一番奥の席へと座り、そして話を始める。

「ほんじゃ、今日のアタイらの仕事についてなんだが…」

＊

それぞれ目的の違うイレギュラー達…
新暦７５年、彼らの集うミッドチルダにて、正史とは異なる物語が始まろうとしていた。

オリジナルキャラ紹介（小説更新共に随時更新）

タツマ・ノダ：２１歳・男性
黒髪で黒い瞳、和服のようなバリアジャケットと二振りの日本刀型のデバイス
過去に、何者かによって両親と妹を殺されている。

オスカー：１７歳・男性
青髪で、ロングコートとマフラーを主に着用。
ある研究施設に捕らわれていた、タイプ－ダブルゼロと呼ばれる戦闘機人

ラフェスト・デュアリス：２１歳・男性
銀色のロングヘアーに真紅の瞳、銃型のデバイスを使用
ある管理世界のレジスタンスとして戦っていたが、管理局に姉を殺される。
以来、世界への復讐の為に力を蓄えている。

パレット：１８歳・女性
腰まで届く赤いロングヘアーの女性。
ある人物と再会する為に、自分の中でけじめをつける為の戦いをしている。

クラム・ル・ルシエ：８歳・女性
金髪のくりっとした目の少女。エリザベートという黒竜を使役している。
ある理由で、里の者たちによって幽閉されていた。

エスティ・トゥデイ：４８歳・女性

ボサボサのオレンジの髪、そばかす、眼鏡、白衣を纏った女性。
上記5人を束ねていること以外、現時点での詳しいプロフィールは不明。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8137y/

ありがちな設定のありがちな話　～リリカルなのはStrikerS～

2011年11月24日01時52分発行